

会議名	次期肉用牛飼養標準改訂に関する近畿中国四国地域ワークショップ、飼料懇談会
開催日時	9月27日 13:30～15:30
開催場所	岡山大学津島キャンパス 一般教育棟 B210
主催者	農業・食品産業技術総合研究機構 近畿中国四国農業研究センター 飼料懇談会
参加人数(概数)	約45名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>日本飼養標準・肉用牛は2000年に改定版が出版されたが、すでに7年を経過している。この間の肉用牛に関する研究の進展、畜産環境問題をはじめとする産業を取り巻く変化に対応して、家畜飼養標準等検討委員会、同肉用牛部会および肉用牛ワーキンググループで改訂の方向を検討し、現在改定作業が進められている。本ワークショップでは肉用牛の日本飼養標準改訂に関して、近畿中国四国地域の肉用牛関係者との意見交換を目的として開催された。</p> <p>話題提供は下記のとおり</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)肉用牛飼養標準改訂の基本方向(畜産草地研究所 甫立京子) <ul style="list-style-type: none"> 改定方針全般について紹介があった。特にビタミンAおよびCをはじめとしたビタミン要求量の見直しが強調された。 2)蛋白質要求量の考え方(京都大学 広岡博之) <ul style="list-style-type: none"> 代謝蛋白システムによって要求量の算出を行うが、飼料成分表に代謝蛋白質顔料の測定値が記載されていないことなどから、蛋白質の要求量の表記はCPおよびDCPとしたい。 3)自給粗飼料資源を利用した肉用牛の飼養(畜産草地研究所 中西直人) <ul style="list-style-type: none"> 最近の研究成果から、稲ホークロップサイレージの利用、トウモロコシ、大麦等のホークロップの利用及び輸入粗飼料の利用についての解説の充実を図る。 4)肉質の新たな評価項目(九州沖縄農業研究センター 常石英作) <ul style="list-style-type: none"> これまでは、農家(生産者)の生産した牛肉は流通業者によって枝肉取引規格に合わせて評価されてきたが、牛肉のトレーサビリティシステムの確立により、消費者が直接評価できるようになった。このような背景から消費者のニーズである品質と安心にも対応できるように解説を充実する。 5)ふん尿量および窒素排泄量の低減(畜産草地研究所 荻野暁史) <ul style="list-style-type: none"> 窒素についてはこれまで報告されている窒素排泄量予測システムを利用して、排泄量の低減方法について解説する。また、肥育期間の短縮により、生産性を落とさずに排泄量を低減する方法についても触れる。

<p>2．今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>食生活が低脂肪を志向し始めている現在、ブランド化(差別化)戦略として、脂肪の多い霜降り肉の生産から、赤肉生産への対応も必要であり、今回の改定ではこの部分にも触れることになっていることは、方向性としてはよいと思われる。</p> <p>特に霜降り肉の生産に向けた、ビタミン A 制御飼養法はやや病的なビタミン A 欠乏症を人為的に作成するもので健全な牛肉生産とは言いにくい面がある。ビタミン要求量を見直しに必要な、さらなる研究が必要である。</p> <p>窒素排泄量の低減も、タンパク質要求量の精密化によってかなり可能であり、今後、より精密な研究が必要である。</p> <p>今後の予定としては 10 月中に素案を取りまとめ、12 月開催予定の家畜飼養標準等検討委員会肉用牛部会で検討し、2008 年 3 月に 2008 年版として刊行する。</p>
<p>3．その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>特になし</p>
<p>4．今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>2．今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題に記載</p>
<p>5．会議の所感</p>	<p>総合討論も活発に行われ、参加者の関心の高さがうかがえた。</p>
<p>報告者</p>	<p>伊藤 稔</p>